米欧亜回覧

第６号
編集・発行
米欧回覧の会
事務局

広く、そして深く、各種の催し盛ん!!

★第三回例会開催さる

「米欧回覧の会」第三回の例会が、十一月二十三日午後一時から国際文化会館で、四十一名の出席を得て開催された。会は浅沼晴男氏の司会で始まり、泉三郎氏の挨拶のあと、各部門の幹事から報告があった。

はじめに会員アンケートの結果による来年度(四月から)の活動計画については有志懇談会で検討中であり二月ごろまでに結論を出す予定との報告があった。また映像部門についてはオリジナル版の修正と英語版の制作を来年三月までに行なう予定であり、四月からはなんらかの形で貸出しも可能にしたいとの報告があった。

二部の「映像の部」は欧州編から帰国までの上映を行ない、続いて泉三郎氏が「回覧実記を読む」を抜粋のテキストに基づいて行なった。

そしてコーヒーブレークをはさんでの三部ではフリーな質疑応答や意見の交換が行なわれ大変に有意義だった。

とくに今回は青山女子短期大学に於いて加納孝代教授の下で「米欧回覧実記」を読んでいる学生たちが参加して彩りをそえた。

なお、第四回の例会は既にご案内のとおり、一月二十九日午後六時より国際文化会館で催されることになっており、今年行なわれた三回の例会を踏まえ、また泉氏の新刊本を素材にして「岩倉使節団の光と影」について論じあうことになった。

★有志懇談会（コア・ミーティング）へのお誘い・・・

熱心な会員が自然発生的に集まって「有志懇談会」を開き、今後の会の運営についてアンケートの集計結果を中心に検討しています。現在十五～六人ですがすでに二回ばかり開催して親睦を深めながら自由に意見の交換をしています。現在のところ例えば、例会については「テーマを決めてのミニ・シンポジウム」、研究会、分科会については「米欧回覧実記を読む会」、「歴史研究会」、「未来ビジョン研究会」、「アジア研究会」、「旅行部会」、「映像部会」などの意見が出ています。次回は左記にて開催予定ですので、コアメンバーの一員になってみようというお気持ちのある方はどうぞ事務局までご連絡下さい。来年度の活動計画をそろそろ固めていきたいと思いますので・・・

- 日時　二月二十日（木）18：00～22：00
- 場所　青山ガーデンテラス（クラウン・インターチェンジ内）
- 会費　四、〇〇〇円（ワイン、夕食代）

「颯爽たる地球人」について

～２１世紀の肖像～

泉　三郎

このたびの新刊「堂々たる日本人」については、売れ行きもよく増刷を重ねており、みなさまのお蔭と深く感謝しております。書評や紹介記事もいろいろ出ておりますが、生の声を含め率直な反響を要約すれば次のようになりましょう。

プラス評価としては、読み易い、若者にも読める、格好の啓蒙書、勇気をあたえてくれる、自信を取戻せる、元気がでる、熱い思いが伝わってくる、題名が今の時代にぴったり、ぜひ政治家に読んでもらいたい、日本国民必読の書などさまざま・・

また、マイナス評価としては、明治を美化し過ぎる、薩長政権の評価が甘い、民権の視座が足りない、大国志向にならぬよう、保守反動にならぬよう、右翼に利用されるな、までいろいろです。

「堂々たる」という言葉が覇権や大国、大建築や豪壮さをイメージさせて、小国や庶民感覚と乖離しているという印象を与えるのかも知れません。しかし実際には、小さくても堂々たりうるし、貧しくても心は錦ということがあります。傲慢でも卑屈でもない、精神的な豊さと強さを志向していると理解していただきたく思います。

これからの「堂々たる日本人」は少なくとも偏狭なナショナリズムとは無縁であり、そのまま「颯爽たる地球人」に通じていなくてはいけないと思います。つまり根無し草のデラシネ的コスモポリタンではなく、日本人としてのアイデンティティをしっかりもちながら世界に通じるということでなくてはいけないと思うのです。

本当の日本人こそが地球人である・・・そのような「二十一世紀の肖像」を模索していきたく願っています。

「米欧回覧実記」よりの抜粋（第三回例会の配布資料から）

伯林府「ウンテルデン」街（羅馬「ホテル」）

聖彼得堡「ネウァ」河ノ船橋

〔オランダ〕

蒸気車ニテ鹿特坦府ニ赴ク、途上ミナ塗泥ノ田地ニテ、溝渠縦横ナリ、村落処処ニアリ、風車閃閃トシテ、林樹ノ上ニ抽テ、水道ハ堤上ヲ流レ去ル、蘭国ノ平地ハ、水面ヨリ低シトハ此等ヲ謂フナリ、鋏路ハ地上ヲ築上クルコト三尺有余ニテ、沙ヲ撤シ、地ヲ鞏固シ、修繕甚タ手ヲ尽セリ、

蘭国ノ船ヲ製スルヤ、其材ミナ他国ノ産ヲ仰ク、而テ其船舶ノ多キト、海外ニ航跡ノ交ルトハ、米英ニツヽク、漕運貿易ノ利ハ、豈ニ天然ニ与奪アランヤ、只人ノ勤惰イカンニアルノミ、

〔ドイツ〕

ベルリン

此府ハ、新興ノ都ナレハ、一般人気モ、朴素ニシテ、他大都府ノ軽薄ナルニ比セサリシニ、繁華ノ進ムニ従ヒ、次第ニ澆季シテ、輒近殊ニ頽衰セリ、且近年頻ニ兵革ヲ四境ニ用ヒ、人気激昂シ、操業粗暴ナリ、

「モルトケ」氏議院ニ演舌セル議

法律、正義、自由ノ理ハ、国内ヲ保護スルニ足レトモ、境外ヲ保護スルハ、兵力ニアラサレハ不可サリ、万国公法モ、只国力ノ強弱ニ関ス、局外中立シテ、公法ノミ是循守スルハ、小国ノ事ナリ、大国ニ至テハ、国力ヲ以テ、其権理ヲ達セサルヘカラス、今夫レ兵備ノ費ヲ惜ミ、平和ノ事ニ充ルハ、誰カ之ヲ欲セサラン、一旦戦起レハ、多年倹勤セル貯蓄ハ、倏忽ノ間ニ蕩尽スルニアラスヤ、

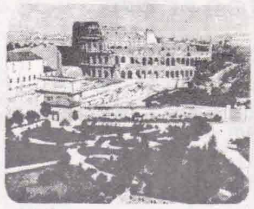
仏人會テ普ヲ破リ、伯林ノ「フランデンフェルゲート」上ノ銅像ヲ分捕シテ、王宮ノ門ニオキシヲ、一千八百十五年ノ戦捷ニ、持帰リテ旧ニ復シ、又先年普軍仏都ニ入リシトキ、仏都城門ノ銅像ヲ分捕シ帰レリ、勝ツ者ハ之ヲ誇耀シ、敗レル者ハ憤恨シ、一ノ銅像、互ニ奪ヒ互ニ復セント、怨恨ノ種ヲウエテ、世ヲ畢ルマテ除カス、抑是ヲ毀ツテ恨ヲ銷サハ、豈他日保和ノ善謀ニアラサランヤ、

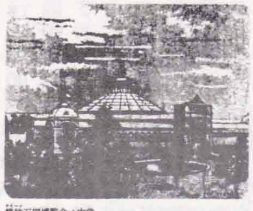
〔ロシア〕

米欧列国ヲ歴聘シテ、深ク遐陬ニ入リシハ、露西亜国ヲ以テ最トス、仏国巴黎ヲ発セシヨリ、漸ク東スルニ従ヒ、開化漸クニ浅ク、「ボルチック」海浜、及ヒ波蘭ノ北ハ、漠野茫茫トシテ、森林榛榛タリ、約略タル人家ノ其間ニ生嘯スルハ、再ヒ米利堅ノ漠野ヲ回想シ、地図ヲ開キテ之ヲ検スレハ、欧羅巴洲ノ大半ハ、猶此様ノ景況ナルコトヲ知ル、然則文明ト呼ヒ、開化ト叫フモ、全地球上ヨリ謂ヘハ、一隅ニ於テ星大地ノ光リニスキス、陸壌ノ広キ十ノ九ハ、猶荒

会場の声

- 「実記」の抜粋解説、わかり易く面白かった。コメントの意見がそれぞれ角度がちがっていて面白かった。
- 若い人たちも含め幅広い世代、経験を有する人がそれぞれの立場で発言されたのはよかった。議題テーマなどなるべく事前に通知をしておくほうがよい。
- コメントは大変面白かったのですが、一通りしゃべって終わりになってしまったのは残念。少なくともそれぞれについての泉先生のコメントも聞きたかった。
- スライドはとてもわかりやすかった。もっとたくさん久米さんのコメントがはいっているとよかったと思う。久米さんのコメントはとても興味深いので・・
- 国家主導、官僚主導の近代化、産業革命の推進、社会福祉政策の推進などについては、フランスから学んでいる点がもっとあるのではないか。
- 英国やドイツと比べて、フランスについては使節団も理解しにくい面があったのではないか。


薩馬ノ古蹟


維納万国博覧会ノ中堂

廃ニ属セルナリ、

露国ハ全ク貴族ノ開化ニテ、人民ハ全ク奴隷ニ同シ、財貨ハ上等ノ人ヨリ包攬セラレ、専制ノ下ニ圧抑セラルヽモ、此ノ成形ニヨル、故ニ露ノ貿易ハ、自ラ振ハス、外国人ノ手ニ、其利孔ヲ専有セラル、聖彼得堡府ノ商店ヲ観ルニ、属目スヘキ大店ハ、尽ク日耳曼人ノ開店ナリ（又英仏人ノ開店モアレトモ、最モ多キヲ謂フ）、

〔イタリア〕

古語ニ曰、沃土之民惰ト、此一語ハ、地球ニ通シテ、不易ノ諺トイフベシ、「アルプス」ノ山ヲコエテ、以太利ノ境ニ入レバ、頓ニ面目ヲカユルヲ覚フ、山秀テ水清ク、空気清暢ニシテ、土壌肥腴ナリ、草木ミナ茂シ、野芳モ妍妍トシテ、美ヲ争フ、然ルニ路傍ニハ、除カサル蕪草アリ、市街ニハ払ハサル塵芥アリ、農ハ野中ニ偃臥午睡シ、或ハ路隅ニ箕踞盤傲ス、馭夫ハ車中ニ睡リ、馬ニ任セテ路ヲ過ス、市中ニハ便服ニテ箕踞シ、酒ヲ飲ミ拇戦ス、或ハ一家団欒シテ飲食ヲナシ、其生業ニ於ル、通シテ勉励ノ気象ニ乏シク、北方諸国トハ、頓ニ異俗ヲ覚ユルナリ、

今英、仏、独逸ノ盛ナルモ、其開化ノ由来セル素質ハ、自ラ羅馬ニ淵源シ、今ニ至リテモ、此都ニ観レハ、歴歴徴スヘキモノ多シ、欧洲ノ文明ヲ談スルモノハ、必ス一タヒ此ニ来リテ、其史伝ヲ考徴スルト云、嗚呼、国ノ文明、其積成ハ一朝一夕ノコトニアラス、之ヲ数千年来ニ孕ミテ、然後ニ煥発スル如此シ、之ヲ考量スレハ、更ニ感スル所アリ、東西洋ノ相隔タル、

〔オーストリア〕

ウイーン万国博

夫欧洲列国ノ大小相分ル、英、仏、露、普、墺ノ大国アレハ、又白、蘭、薩、瑞、嗹ノ小国アリ、国民自主ノ生理ニ於テハ、大モ畏ルニ足ラス、小モ侮ルヘカラス、英、仏両国ノ如キハ、ミナ文明ノ旺スル所ニテ、工商兼秀レトモ、白耳義、瑞士ノ出品ヲミレハ、民ノ自主ヲ遂ケ、各良宝ヲ蘊蓄スルコト、大国モ感動セラル、普ハ大ニ薩ハ小ナルモ、工芸ニ於テハ相譲ラス、而シテ露国ノ大ナルモ、此等ノ国トハ、猶其列ヲ同クスル能ハス、墺国ノ列品ヲミレハ、勉強シテ文明国ニ列スルヲ得ルニスギス、是他ナシ、民ニ自主ノ精神乏キニヨルナリ、噫此等ノ競ヒハ、是太平ノ戦争ニテ、開明ノ世ニ、最モ要務ノ事ナレハ、深ク注意スヘキモノナリ、

〔アジア〕

弱ノ肉ハ、強ノ食、欧洲人遠航ノ業起リシヨリ、熱帯ノ弱国、ミナ其争ヒ喰フ所トナリテ、其豊饒ノ物産ヲ、本洲ニ輸入ス、其始メ西班牙、葡萄牙、及ヒ荷蘭ノ三国、先ツ其利ヲ専ラニセシニ、土人ヲ遇スル暴慢惨酷ニシテ、苟モ得ルニアリシラ以テ、反側数生シ、己ニ得テ又失ヒ、英人因テ其轍ヲサケ、寛容ヲ旨トシ、先ンスルニ教育ヲ以テシ、招撫柔遠ノ方ヲ以テ、今日ノ盛大ヲ致セリ、

この点、細心の注意でフランス編を読み直す必要があるように思います。

・イデオロギーに代わって文明論が東西冷戦後の世界のパラダイムになっている。文明論を大いに深めて欲しい。

・「映像」を見ることで文章だけではわかりにくいことや、逆に写真や絵をみただけでは文とつながらないところが、説明付きのスライドでとてもわかりやすかった。

映像世代の観点また素人の観点から申し上げると、補足の説明がなくてもわかるような工夫がほしいと思いました。たとえばドキュメント風にするとか・・・

・世代間をいかにつなぐかが重要な課題、若い人は面白そうだけど言葉がわからない、という問題がある。久米の漢語がわかりにくいことは事実で、若い世代に語りついでいくには、現代語訳も必要ではないか。

・明治をつくった人たちが堂々としていたとしたら、何故それがおかしくなっていったのか。世代の繋ぎ目に問題があったのか。

『米欧回覧の会』ご案内

趣　旨　この会は「岩倉使節団」に興味を持ち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この大いなる旅と「実記」はまさに「温故知新」の宝庫と言えましょう。
この素材を媒体にして歴史をふりかえり現代の直面する諸問題についても自由に語りあおうという会です。

会　費　上の趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例　会　年に４回くらい会合をもつ予定です。

事　業　次のような活動をする予定です。
映像サロン・講演会・旅行会研究会・シンポジウムなど。

機関紙　年に４回程度機関紙を発行し、会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

幹　事　会員の中から、代表１名、幹事数名を選び、運営を担当します。

会　費　年会費3,０００円とし、主として通信費および機関紙代に充当します。例会・研究会・講演会などについては、その都度の会費とします。

事務局　当面は『ミササ・オフィス』に置きます。

〒192　八王子市元横山町１－１４－１６
ミササ・オフィス　TEL 0426-46-1949
FAX 0426-45-8700

入会申込

氏名・連絡先（自宅或いは勤務先の住所TEL・FAX）現職＆キャリアを事務局までFAXまたは郵便でお送りください。
なお、年会費は郵便払込が便利です。
００１８０－２－５８０７２９
米欧回覧の会

『米欧回覧の会』

★第五回例会案内

日　時：４月19日（土）　13：00～17：00　ホール
　　17：30～19：00　レセプション
場　所：国際文化会館
テーマ：「いま、岩倉使節団から何を学ぶべきか・・・」
　１部　映像「堂々たる日本人～岩倉使節の群像」の上映
　　今後一年の活動計画及び組織について・・・
　２部　「いま、岩倉使節団から何を学ぶべきか」
　　スピーカーの発表とサロントーク
　３部　レセプション（交歓パーティ）
会　費：１、２部　2,５００円
　　３部　　3,５００円（スナックパーティ）

＊岩倉使節団とイタリアの夕べ

主　催：東京イタリア文化会館並びに
　　アールジーファーイースト（ジノリ社）
日　時：３月13日（木）　18：00～20：00
場　所：イタリア文化会館（九段）
- 岩倉使節がジノリ社を訪れた際のサイン入り皿やサイン帳の披露あり
- ゲストに岩倉具忠氏（京都大学教授、前ローマ日本文化会館館長）
- 泉三郎氏の映像「岩倉使節団、イタリアを往く」

問合せ：アールジーファーイースト
　　（０３－５７２２－５６１１）

＊プリンストン大学で「岩倉使節団の研究会」

日　時：３月27日、28日、29日
場　所：プリンストン大学
- マーチン・コルカット教授などを中心に、泉三郎氏も参加、映像講演の他、各氏より研究発表やディスカッションの予定。

問合せ：コルカット教授（６０９－４６６－９１８２）

＊大阪で支部設立の動き・・・

泉三郎氏の大阪での講演を機会に、１月８日夜、阪急インターナショナルホテルで、「米欧回覧の会」や「岩倉使節ツアー」のメンバーが集まり、楽しい会食の時間をもった。
参加者は中川努氏や多屋貞男氏ら７名で、その際大阪での支部設立の話がもりあがり、山崎岳麿氏が世話人となって準備をすすめることになった。
関心のある方は下記にご連絡下さい。
山崎岳麿　豊中市岡町北３－９－18（〒５６０）
０６－８５３－３１３７（ＦＡＸ兼用）

＊編集後記

旧冬十二月二十六日、多田幸子会員のテラス・ガーデン・サロンで有志が集まってワインパーティを開きました。いつもは真面目な話ばかりしているのでたまにはワイングラスでも傾けながら、リラックスして楽しくやろうという訳です。

それなら岩倉使節に因んで「カリフォルニアワインにしよう、音楽もアメリカにふさわしいものにしよう」とワイン通の山田哲司氏や音楽通の岩崎洋三氏が趣向をこらして、大変楽しい会になりました。ワインが入るとみなさんの口もおのずから滑りがよくなりまさにサロン的雰囲気、しかしジョークがとびかう中にもさすがに硬派の議論も多く、半沢健市氏はそれを評して「新派のニューナショナリストと旧派の戦後民主主義者に大別され、さらにはさまざまな変種が混在している」と分類しました。

そして「君は君、我は我なり、されど仲よき」という言葉で無事に終わりました。

特集

『堂々たる日本人
～知られざる岩倉使節団～』

出版記念パーティー

泉三郎著「堂々たる日本人」の出版記念パーティが、一月七日午後六時半より日本プレスセンター十階のホールで行なわれた。新年早々にもかかわらず各界から二百三十名近くの人が参集し大変な盛会となった。

パーティは新年にふさわしく笹川典生クインテットの演奏に乗って華やかな雰囲気の中で始まり、諸先生方からの個性あふれるスピーチをはじめ、映像「堂々たる日本人～岩倉使節の群像」の上映、岩倉使節団のご子孫のご紹介、音楽と映像による「世界一周」の趣向など盛りだくさんの趣向で午後九時までにぎわった。

以下、当日のスピーチを要約してご紹介したい。

斉藤茂太先生
日本旅行作家協会会長、斉藤病院名誉院長

昨年日本郵船の「飛鳥」が初の世界一周クルーズを行ないましたが、私も船上講師としてそれに乗船しました。

泉さんも講師の一人としてリスボンからニューヨークまで乗船して五回にわたって「岩倉使節」の講演をなさいました。それが大変な人気で一番大きなグランドホールが超満員という盛況だったのです。まあこの船にはいろんな講師が乗って各地で講演をしたんですが、泉さんのが一番評判がよかった・・私も実はその講座で大変勉強させてもらったわけなんです。

さて今日はそのエッセンスをまとめた「堂々たるご本」ができまして、本当におめでとうございます。このごろの日本はマスコミもふくめやけに自己卑下が多いんですが、明治の初年にこういう「堂々たる日本人」が出たということを知るだけでも大いに勇気付けられます。

芳賀　徹先生
国際日本文化センター教授、東京大学名誉教授

私はフランス留学からかえって来たとき、本郷の古本屋で「米欧回覧実記」の五冊揃ったのをみつけました。読みだしたら実に面白くてわくわくしてくる。アメリカ、イギリス、フランス、ドイツと十二カ国を旅してかえってくる、一年十カ月の旅行が隅から隅までこれ以上ないような言葉で、鮮明に、鋭く、重厚に、深く、広く、遠く、観察して書かれている、本当に驚嘆しました。

泉さんはその旅を実際に追跡され、「明治四年のアンバッサドル」以来、次々と本をだされまして、今回の本でそれがいよいよ集大成されました。

岩倉使節団の旅行のさまについてはもちろんですが、この本の真ん中から後半にかけては岩倉使節が一年九カ月欧米を廻っている間に留守政府が何をしていたのか、帰国後どうなったのかそのきわどいところが実に要領よく書かれていまして、まさに堂々たる日本人の気迫がこの本に乗り移って表現されているように思いました。

これからの日本がどうなっていくのか誰にもわかりませんが、もう一回「米欧回覧実記」を読み、岩倉使節団の歴史を学び、われわれのものにすることによって、日本も生きながらえることができるのではないかという感じがいたします。世紀末の日本にあたってまことに重要な一書が出まして、今日こうして多くの方々が集まって出版を祝うことはこれからの日本を考える上に大変重要なことであると思います。

藤岡信勝先生
東京大学教授、自由主義史観研究会代表

私は昨年の春「諸君」という雑誌に「廃藩置県」のことを書いたことがあります。そこで岩倉使節団のサンフランシスコでの伊藤博文の日の丸演説を引用したのですが、泉さんから早速お手紙をいただきまして、「こんな映像の会があるのだけれど参加してみないか」というお誘いがありました。私は以前から泉さんの本は読んでいましたが、そういう映像の会があるとは知らなかったし、映像で旅が追体験できるなら是非参加してみたいと申し込んだのです。そして「米欧回覧の会」という集いがあっていろいろの方がいろいろの角度から歴史を研究されていることを大変こころ強く思ったのです。

私は誇りのもてる日本歴史を書かなくては二十一世紀の日本はないという危惧をいだいておりますが、「堂々たる日本人」はまさにその意味でも「うれしい、元気の出る、びったりの書」だと思います。

伊藤善市先生
帝京大学教授、東京女子大学名誉教授

「書名」・・これがまことに絶妙ですね。今、日本にもっとも欠けているのは「堂々としてない」ということです。なんでも謝って・・やすっぽく、謝ればいいだろうといったところがある。卑屈というのは傲慢にマイナスの符合をつけたものだと思いますが、卑屈か傲慢かになってしまう。「堂々」というのは、お金があるからとかないからとか、身長が高いからとか低いからとか、そんなことではない。いつでも平常心を失わないこと、それがいまもっとも望まれている時です。そういうときにこういう本が出たということは、本当に共鳴と共感を感じました。

それに泉さんは岩倉使節の旅をほとんど追体験をしている、スゴイことですね。これは暇がなければできませんし、お金がなければできません。しかし、暇と金があっても能力がなければできません。しかもあのような形でこれを表現するということは能力だけでもできない、ファイティングスピリットと愛国心がなければできない、と私は思いました。

板垣興一先生
一橋大学名誉教授、元八千代国際大学学長

第一にこの本の素晴しいところは「読ませる」ということだと思います。なによりも泉さんの冴えた筆の力が溢れている。文体が独特であり、著者みずからが読者に問いを掛ける、そしてそれに応える問答形式が実にリズミカルに出来ておりまして、必要によっては久米邦武の原文を引用しそれに親切な解説を加えるという、その文体が魅力的であり読者を飽きさせないゆえんであろうと思います。

第二は泉さんは坂本二郎氏のお弟子さんですからその影響がある

と感じています。坂本氏は経済政策論をやっていましたが、シュンペーターの文明論的著作である「資本主義、社会主義、民主主義」の翻訳もやったりして、後には未来学会をつくりました。ですから泉さんは新しい文明論的な視点をそのころから勉強していたのではないかとみているのです。

第三に、この本が今、世界も日本も大変化するこの激動期の中で、とくにわが国の場合、政・官・財・民を問わずモラールというものが退廃している時期、そういう世紀末の症候群があらわれている時期にあたり、泉さんは、この書物を通じて「堂々たる」威厳とか品格、そして思いやりのあるこころの大切さを説いておられる。世界にはさまざまな民族がありさまざまな価値観がありまさに多元的であります。それが平和的に共存し、共生できるようにならなくてはいけない、そういう日本人よ出よという、憂国の気持ちをこめてわれわれにアピールしている、そこに感銘をうけたのであります。

川喜田二郎先生
川喜田研究所理事長、東京工業大学名誉教授

今日の会は私も岩倉使節団の幹部の一員だという気持でやってきました。そうしたらまったくそのとうりでした。ここに出席しているみなさんは私だけでなく全部が岩倉使節の一員なんです、いまこの席はロンドンかどこか知りませんがそのレセプションに出席しているところで、そしてビスマルクとかいろいろの人と会談している…そういう会なんです、そう思おうじゃないですか。

当時の状況に移りますと、いやしくも日本は異質な文明とおつきあいしようという、どうなるかまったく想像もつかない冒険だったと思います。ハードウェアとしての黒船、そしてその背後にあるソフトウェア、それを探りにいくために、よくもこのように馬鹿げた一大視察研修団を編成して、一年九カ月余ものうのうと米欧をほっつき歩いたもんだ、これは勇断ですよ。私は粛然としてこれを受け入れます。素晴しいじゃないか、岩倉使節団、万歳だ。

そこで使節団は何をしたかというとにかくこの目で現場をみようとした、この魂が大事だ、しかも見るだけでなくホテルにかえってカンカンガクガク大議論した。それが大研修合宿旅行のゆえんなんです。それは先生に見習うというような卑しいもんとは違うんだ、あくまでも自らの力でわたりあうんだという気概である。

そこでその根本は、国を救うという意識だった。生まれたての日本国を植民地にしてはいけないという愛国心だった。だから我を忘れてがんばった。彼等には我なんて下らんものは意識にないんです。デカルトがなにかいうか知りませんが、それならデカルトの横面をひっぱたけといいたい。それが我を忘れるということなんだ。それを率直にいわれたのが泉さんだと思う。

さて、それを今後に移すとどうなるか。明治の先輩たちが出会ったのは、物質とエネルギーの大革命だった。今は違う。泉さんはそれをコンピューター革命だといっている。が、言い替えれば情報革命のことである。その怪物にどう対処するか、われわれも岩倉使節団の一員になったつもりで、明治の先輩たちに恥じないように、我を忘れて新しいグローバルな世界をつくろうじゃないですか。

井尻千男氏
日本経済新聞編集委員
評論家

岩倉使節は、やるべきことがいくらでも芋づる式にでてくるような素材です。先程からのスライドをみても使節団のその後を書くだけでも大河小説になると思います。そういう意味で泉さんの岩倉使節団に出会った幸福をずっと思っておりました。

さて、私も「堂々たる日本人」を読んで小さなコラムを書きましたが、その最後の〆の言葉は「明治の遺産をすっかり食い潰した現代」ということでした。そのすっかり自信を失っている日本人へ、あの素晴しいネーミングで本を出された。このセンスを大変私は嬉しく思いました。

それから岩倉使節を繰り返し繰り返し追体験している泉さんは、その素材を自家薬籠中のものにして語り口がまた堂にいっている…その見事さがひときわ印象に残りました。

もう一つ泉さんに期待を寄せていることを申し上げたい。それは一方で学究的な大きなテーマに取り組みながら、同時に生活の中で、茶の湯の数奇者でもある。八王子の泉さんのところの茶室でお茶をいただいたことがありますが、泉さんはこういうところでも日本の歴史を確認しながら、同時に最も新しいこれからの日本を考えておられる。そういう伝統を大事にしながら、かつ進取の気象の激しい二面というものが一つの人格として円環を結んでいる、それがまた素晴しいと思います。

鈴木幸夫先生
麗沢大学教授、元東京テレビ解説委員長

現在、一般に「閉塞感、閉塞感」といわれていますが、それは自分がつくりだしているもので、誰かが圧力をかけているものでもなんでもありません。これは自分の心の切り替え方次第でどうにでもなる問題です。今いちばん悪いのは国民だと思うんです、それからマスコミである。もっと前向きに考えるべき時だと思います。

かつて明治の終わりから昭和にかけて、いろいろの選択肢があったんですね。あの時に、自由主義への道、英米への協調もあった、ところが国権、軍国主義、ファシズムに走ってしまい、日本は方向を間違えた。今、われわれはここでしっかり選択肢を間違えないようにしなくてはいけない。

戦後のことを考えますと、経済安定本部というのがあって、私なんかも若い記者として詰めておりましたが、あの頃はろくなもの喰わないで明け方になるまで激論をかわしていた。それが結局高度経済成長を支えたと思うんです。それに比べれば、今は右肩あがりでなくなっただけで、やろうと思えばいくらでもやれる段階にある。だからわれわれは、さきほど川喜田先生がいわれたように、岩倉使節の一員になったつもりで、みんなで大いに議論をし、新しい日本をつくっていく気概をもとうじゃありませんか。